

謝辞

「もっと、森を」をコンセプトに、2007年からスタートした私たちmore treesは、多くの皆様のご支援を得て5周年を迎えることとなりました。この場を借りてお礼申し上げます。

5年の間に時代は大きく変わりました。リーマンショック、ユーロ危機、東日本大震災と、あらゆる分野が激動の最中にあります。しかし、森は悠久の時間の中に生きています。

我々の生活よりはるかに長い期間、我々の文化の歩みを見守ってきた森に、新しい未来の素地を見いだすことも可能でしょう。私たちの活動に終わりはありません。常に、新たな森の可能性を開いていく所存です。

more trees 代表 坂本龍一



more trees 設立から5年経ち、「more treesの森」も、国内11カ所、海外1カ所の計12カ所に拡大しました。その影には、現地自治体、地元企業の多大なるご支援があったことは言うまでもありません。さらに、様々なNPOや評価機関からご協力を得たことも我々の活動を力強く支えていただきました。誠にありがとうございます。

私たちmore treesの活動は、「森林保全」をコアとしています。森林は、我々人類の1世代ではなく、少

なくとも3世代を要すことではじめてその本来の姿を見せてくれるものです。従って、私たちの活動のこの5年は、森林時間で考えますとまだまだ一瞬のことでしょう。しかし、この一瞬一瞬こそが、未来へつなげるステップであり、大事にすべきことであると考え私たちは活動を続けています。全世界の変化は激しく、スピードも増す一方です。この潮流を極限まで活かし、新しい視点からの森づくりに挑戦していきます。

more trees 事務局



Photograph by JAVANDRX

more treesの活動について

more treesは個人、法人を問わず、多くの方々の支援に支えられ、今日まで活動を続けてきました。自主事業としてカーボンオフセットやものづくりを展開し、「森と都市」をつなぐ活動を行ってきました。

そういった活動の啓蒙は主にWebサイトを通じて実施しています。さらに、年に一度more treesの活動内容と財務状態を報告するイベントを実施し、ステークホルダーの皆様へ情報を公開しています。また、大

変ありがたいことに、メディアから取材の問い合わせも多く、全国紙、地方紙をはじめ、林業専門誌からファッション誌にいたるまで、幅広いメディアでご紹介いただいております。

こうした流れを受け、企業様と協働でプロジェクトに取り組むことも多く、more treesの重要な動力源となっております。企業様との活動を通じて、山村と都市とを連携させるプラットフォーム構築に注力し、新

しい産業の可能性を広げるために行動しています。こうした活動はすべて森林に通じています。森林の可能性を開くための挑戦に終わりはありません。



- 1 2 3 6 7 8
- 4 5 9 10
- 11

- 1 宮崎県諸塚村の蜂洞
- 2 「more treesの森」第8号の調印の際の記念植樹
- 3 高知県梺原町にある「more treesの森」第1号にて
- 4 高知県中土佐町の「more treesの森」第2号入口に地元の方が設置した案内板
- 5 大分県日田市上津江町の森の「輪掛け乾燥」
- 6 岩手県住田町の再造林現場で育つスギの若木
- 7 宮崎県諸塚村にある「more treesの森」第6号に集まった関係者一同
- 8 長野県小諸市にルイ・ヴィトンと協働して立ち上げた「more treesの森」第5号の調印式
- 9 高知県中土佐町の「more treesの森」の看板前で中土佐町長と代表坂本が握手
- 10 鳥取県智頭町にある「more treesの森」第12号に集まった住民の方々
- 11 岐阜県東白川村/加子母に立ち上がった「more treesの森」第11号の調印式

more treesの歩み

目次

- 謝辞 p.1
- 事務局あいさつ p.2
- more treesの活動について p.4
- more treesの歩み&目次 p.6
- 森づくりプロジェクト p.20
- カーボンオフセット事業 p.26
- more treesものづくりストーリー p.34
- more treesのツーリズム p.38
- その他の取り組み p.42
- 収支決算 p.44
- 協賛法人一覧 p.45
- 掲載媒体

2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	4・5
森づくり 7● more trees 始動 11● 高知県構原町と「more treesの森」第1号調印 p.8	8● 高知県中土佐町と「more treesの森」第2号調印 p.9	2● フィジー諸島マングローブ植林調査 4● 北海道下川町他3町と「more treesの森」第3号調印 p.10 5● フィリピン キリノ州と「more treesの森」第4号調印 p.11 9● 長野県小諸市とルイ・ヴィトン ジャパンと協働で「more treesの森」第5号調印 p.12	4● 宮崎県諸塚村と「more treesの森」第6号調印 p.13 ● 熊本県小国町と「more treesの森」第7号調印 p.14 ● 株式会社トライ・ウッド(大分県日田市上津江)と「more treesの森」第8号調印 p.15 6● 「more treesの森」第4号がCCBSを取得 11● 新潟県新潟市秋葉区と「more treesの森」第9号調印 p.16	2● 「more treesの森」第4号がVCSを取得 7● 岩手県住田町と「more treesの森」第10号調印 p.17	3● 岐阜県東白川村/加子母と「more treesの森」第11号調印 p.18 7● 鳥取県智頭町と「more treesの森」第12号調印 p.19	
	企業連携 3● カーボンオフセットサービス開始 第1案件 CD「koko」 p.21 7● 伊勢丹 Bonds with Designers 10● ANAセールス「四万十エコツアー」	3● 坂本龍一の全国ツアーにカーボンオフセットサービス導入 p.21 9● ANAカーボンオフセットプログラム展開(環境省モデル事業) 11● J-WAVE「BLUE PLANET」取材収録排出量をオフセット 12● TOKYO FM「エンヤの森プロジェクト」 p.22	4● BMW Japan 「MINIMALISM PACKAGE」展開 p.22 5● 環境リレーションズ研究所「カーボンオフセット年賀」 10● あいおいニッセイ同和損保株式会社 Web約款寄付開始 12● 生物多様性COP10カーボンオフセット p.23 ● ナチュラルローソンカーボンオフセットキャンペーン p.23 10● more trees オリジナルプロダクト 新作発表会 p.30	5● 株式会社モンテローザ・白木屋「Forest Cocktail」展開 p.24 7● 日本旅行共同企画「タカシマヤカード会員向け四万十ツアー」 pp.35-37 9● スターバックス従業員向け被災地ボランティアツアー企画 pp.35-37 10● ルイ・ヴィトン ジャパン テスラモーターズ顧客向けツアー企画 pp.35-37 11● ANAカーボンオフセットキャンペーン展開 p.24	1● プロ野球の森プロジェクトに参加 p.25	
	普及啓発 4● 木のUSB製作	1● 深澤直人氏デザイン「木のベンチ」 3● モノづくりプロジェクト本格始動 p.29 9● 渋谷バルコにて森の写真展「TOUCH WOOD展を開催」 10● more trees オリジナルプロダクト発表 伊勢丹新宿店にて鳩時計コレクション展開 p.29		11● 東京インターナショナル・ギフト・ショー 2011春に出展 3● 木のケータイ TOUCH WOOD SH-08Cがドコモから発売 p.33 4● Webストア more trees store を開設 11● TOUCH WOOD SH-08Cの専用鹿革ケースを発売 p.33 ● 大阪マラソンExpoにブース出展	3● カーボンマーケットExpoにブース出展 5● more trees organic 発売 p.33	
				LIFE311 4● 被災地支援プロジェクトLIFE311 始動	1● LIFE311 with ビグライフ展開 5● LIFE311の寄付金約1億2700万円を住田町に贈呈	

ここでは、more treesの5年の歩みを可視化しています。「more treesの森」を軸として、more treesの事業が展開されている様子が確認できます。私たちが森づくりを行うときは、まず徹底したリサーチから始めます。その過程で、自治体の人々との関係も深まり、地域のステークホルダーとの関係も育まれます。同時に、都市部の要望や意見などを地域にフィードバックしていきます。一方、本流たる森づくりは、森林組合を中心に森林保全に関する情報を交換していきます。この時、森と

都市をつなぐための様々な取り組みへの理解とモチベーションを高めます。その中で、地域にある様々な資源の品質や加工技術等をリサーチします。これによって、都市部での商品、サービスの企画につなげることができ、「more treesの森」で採れる資源を加工し、供給することが可能になるのです。つまり、私たちの活動のコアを成しているのは森づくりと地域連携とを表裏一体として動かすということ。これによって地域の経済活性、森林保全を進めていくことができます。

各出来事の右にある数字は報告書内記載ページです

森づくりプロジェクト

「more treesの森」は、more treesが地域住民との協働で森林保全活動に取り組む森のことを指しています。

more treesが森林を保有しているのではなく、この森林が生み出すめぐみを活用する事で都市と森をつないでいます。

たとえば、森林の二酸化炭素吸収量が分かりやすい例です。私たちはこの吸収量をカーボンオフセットサービスとして企業に提供し収益を上げています。

収益の一部は「more treesの森」に還元され、森林整備などに活用されます。これによって、森林力はさらに高まります。

また、「more treesの森」へのツーリズムを組み上げ活用することは、森の景観や地域の特産物までもを観光事業に結びつけることから地域資源を活用する取り組みと言えるでしょう。

私たちは、こうした森林の力を全国各地に増やすため、さまざまな自治体と連携しています。

現在「more treesの森」は、国内において北海道から九州まで全国に11カ所、海外においてはフィリピンキリノ州に1カ所展開しています。more treesではすべての森で、森林機能を高めるための保全活動を行っています。しかし国内外で問題の質が異なるため方法論は様々です。まず日本国内には豊かな森林資源がありますが、国土の25%を占める人工林は大半が放置されてきたため、間伐を中心とした整備が求められています。一方海外では、急激に森林が姿を消しており、まず森林資源の減少を食い止めるためのア

クションが必要であり、同時に植林し新たな森を育てることが求められています。

どちらも忘れてはならないのが、森は地域のコミュニティとともにあり、コミュニティの健全さが森林保全の健全さにもつながっているということです。そこで私たちは、国内外のどちらのケースでも、まずコミュニティの現状を把握し、そのポテンシャルを引き出すことを主軸に置いて活動しています。「more treesの森」の主役は、常に地域のコミュニティなのです。



more treesの森第1号調印:
高知県梼原町



期間: 2007年11月-
緯度経度: 33°25'56.00"N, 132°54'24.00"E
対象地区詳細: 高岡郡梼原町東向 他
樹種など: スギ、ヒノキ
実施主体: 梼原町森林組合
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

2007年11月30日、高知県梼原町にてmore treesの森づくりとなる第1号プロジェクトをスタートしました。高知県は県土の約84%が森林におおわれており、森林率では日本一。うち65%はスギやヒノキなどの人工林で、間伐が急務となっています。本プロジェクトは高知県が進める「協働の森づくり事業」の仕組みを活用することでスタートしました。この事業では、人工林を整備することにより発揮される森林の二酸化炭素吸収能力を定量的に評価する仕組みを取り入れています。

プロジェクトの経緯: 梼原町は四万十川源流部に位置しており、町の90%以上が山林に占められている自然エネルギーの導入にも積極的な町です。スギを主体とした森を多く持つ梼原町では「協働の森づくり事業」によるCO₂吸収機能の評価に加え、国際的森林認証であるFSC認証の取得、森林セラピーや木質ペレットの活用等、新しい森のめぐみを生み出す取り組みを進めています。そのような町の姿勢がmore treesの森づくりへの理念と共鳴することで本プロジェクトのスタートとなりました。スタートにあたり、橋本大二郎 高知県知事(当時)、中越武義 梼原町長(当時)、そしてmore trees代表の坂本龍一の3者による調印式が実施されました。

プロジェクトの進捗: 梼原町では、森林整備を進めていくことに並行して、人々が森を訪れる機会を提供しました。2008年にはANAセールスと共に企画したエコツアーが実施され、2011年にはタカシマヤカード会員向けの限定ツアーが実施されています。梼原の誇る森林セラピーを体験したり、実際の森林整備につながる間伐体験を行うことはもちろん、食材や宿泊など、森の地域のめぐみを堪能する機会を都市に提供してきました。また、地元の木材を活用したノベルティを企業向けに企画するなど、材の活用についても取り組んでいきました。

more treesでは設立以来、森の持つ様々な機能が「森のめぐみ」として正当に評価される仕組みを作ることを森林保全の足がかりと考えてきました。2012年現在、森林整備の範囲は当初の目標に到達し、次なるステップに進んでいます。

8

more treesの森第2号調印:
高知県中土佐町



期間: 2008年8月-
緯度経度: 33°24'35.00"N, 133°07'53.00"E
対象地区詳細: 高岡郡中土佐町大野見萩中
樹種など: スギ、ヒノキ
実施主体: 須崎地区森林組合
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

2008年8月18日、高知県中土佐町にてmore treesの第2号となる森づくりプロジェクトがスタートしました。第1号の高知県梼原町に続き高知県の進める「協働の森づくり事業」の仕組みを活用しています。これにより、森の持つ二酸化炭素吸収能力を定量化することで、新しい「森のめぐみ」を評価し、森づくりの意味をより明確に、分かりやすく伝えることを目指していきました。

プロジェクトの経緯: 中土佐町は四万十川上流部に位置しながら太平洋土佐湾に面する町です。森と海の資源を共に有し、そのめぐみによって発展してきた同町は、森と海のつながりを強く意識するとともにその両方を持続的に活用するための森づくりを続けてきました。日本の大半の地域において林業経営が難しくなる中で、森の手入れである「間伐」を行う際に、その材の活用を前提とした「搬出間伐」を精力的に推進してきた地域です。少しでも森のめぐみをうまく活用するという姿勢を意識高く貫いてきた中土佐町と、more treesの森づくりへの理念が共感し、森づくりの協定を締結するに至りました。

プロジェクトの進捗: 中土佐町では、現地のヒノキ材を現地の事業者が加工・製作したノベルティの活用や、ヒノキの葉から抽出される精油を活用したグッズを企業向けに提案することで森と都市をつなぐ取り組みを展開しています。また、ノベルティだけでなく、企業の本業の中で中土佐町の木材を活用する取り組みも進め、ヒノキ材をふんだんに使用した棺“エコフィン・ウィル”や、木の携帯電話“TOUCH WOOD SH-08C”などが誕生するきっかけとなりました。山側の認識と都市との認識が新しく出会うことで、地域にこれまでになかったノウハウが蓄積されるといった効果も生まれ、森づくりを始点に始まる地域連携のプラットフォーム的な役割として中土佐町との取り組みが続いています。

9

more treesの森第3号調印:
北海道下川町 他3町



期間: 2009年4月-
緯度経度: 44°17'12.00"N, 142°40'32.00"E
対象地区詳細: 上川支庁下川町溪和 他
樹種など: トドマツ、カラマツ、エゾマツ、カンバ
実施主体: 下川町森林組合
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

下川町は、1900年代初頭より、農林業と鉱山の町として発展してきました。しかし高度成長期における若者の流出や鉱山の休山等により、一時的に人口の減少する町となってしまいました。そこで持続的な森づくりを産業の中心に置くことによって、町を発展させる取り組みを進めてきました。2000年代初頭には自らの運用する森のCO₂吸収量を海外に向けて販売する計画を始め、ゼロエミッションの木材加工やFSC認証を取得する等、森林資源を余すところなく活用していこうという取り組みを最前線に立って行ってきました。

プロジェクトの経緯: そのような先進的な森づくりへの意識はmore treesの持つ理念と共鳴しmore treesはこの地域での森づくりを展開するに至りました。また、本プロジェクトは環境省の定めるオフセット・クレジット(J-VER)制度の森林管理部門のプロジェクト第1号として登録され、森のCO₂吸収量は環境省の公認を受けることとなりました。

本プロジェクトは、2009年4月21日、北海道内の4町(下川、足寄、滝上、美幌)で構成する「森林バイオマス吸収量活動推進協議会」および4町各自自治体との協定で実現しました。上記4町長(森林バイオマス吸収量活動推進協議会・会長兼下川町長である安齋保氏、足寄町長・安久津勝彦氏、滝上町長・長屋栄一氏、美幌町長・土屋耕治氏)とmore trees代表・坂本龍一による調印式が実施され、プロジェクトの幕開けとなりました。

プロジェクトの進捗: 以後は下川町の森を中心に、間伐を推進し、かつそこから生み出されるJ-VERを活用したカーボンオフセットを様々なシーンに提供しています。2009年より始まった全日本空輸株式会社の「カーボンオフセットプログラム」は環境省のモデル事業としての認定を受け、また22年度カーボンオフセット年賀寄付によるカーボンオフセットにも採択されました。

また、下川町の森から生まれたトドマツの精油は、ルイ・ヴィトンの森づくりの一環としての写真集に活用するなど、森のめぐみの活用が進められています。

more treesの森第4号プロジェクトスタート:
フィリピン・キリノ州



期間: 2009年-
緯度経度: 16°22'21.00"N, 121°44'24.00"E
対象地区詳細: sto.Nino, Maddela 他
樹種など: Narra, Molave, Dao, Tuai, Palosapis, Balakat, gubat, Kalantas, Pomelo, Citrus family, Lanzones, Rambutan
実施主体: PEDAI, DSAFA, STISFA
カーボンオフセットクレジット: VCU
取組内容: 再植林、アグロフォレストリー

ルソン島北部に位置するキリノ州はシエラマドレ山脈とカラバリヨ山脈に囲まれた山岳地帯であり、スペイン植民地統治時代には未開の地であったといえます。しかし近年では農地開拓などの影響で豊かな森林資源が減少の危機にさらされています。キリノ州はフィリピン共和国政府において、生物多様性を保全するために最も重要な地域であると指定されており、森林の再生・保全が求められている地域です。

プロジェクトの経緯: 2009年、more treesはこれら重要な地域における森づくりを進めることとし、主なる対象地としてキリノ州のマデラ市を中心に植林活動をスタートしています。このプロジェクトは2010年6月に、CCBスタンダードというプロジェクト基準の認証を獲得しました。CCBスタンダードとは、プロジェクトの質を見極める基準で、気候変動対策、プロジェクト地の地域コミュニティ及び生物多様性の保全への貢献度合いの基準です。この基準においてゴールドを取得したこの森づくりプロジェクトはこれら3方面に貢献する「トリプルベネフィット」なプロジェクトであることを意味しています。

プロジェクトの進捗: 本プロジェクトは、コンサベーション・インターナショナル本部、フィリピン天然環境資源省(DENR)、キリノ州政府、マデラ市、現地住民組織(PO)が2団体、現地NGO PEDAI、そしてmore treesの8者による同意契約書を結んでいます。プロジェクトは2010年に対象地への苗木の植林が完了し、今後約20年をかけて「森を育てていく」フェーズに入りました。森林火災を防ぐための防火帯の整備や日々の見回り、活着できない樹木が生じた場合の追加的な苗木の育成等、地域住民と共に森を育てていきます。このプロジェクトは、アグロフォレストリーの仕組みを取り入れ、林間に農作物や果樹を植える事になっています。森が育っていく過程で生まれる果物等の「森のめぐみ」は、そのまま、プロジェクトに参加している地域住民が収穫し、現金収入を得ることができる体制を整えています。これにより、森を育てることが、単に緑を増やすということだけではなく、地域住民の生活の向上にもつながり、持続的に森林保全が実現されます。

more treesの森第5号調印:
長野県小諸市



期間: 2009年9月-
緯度経度: 36°22'41.00"N, 138°28'10.00"E
対象地区詳細: 小諸市甲字野馬取 他
樹種など: カラマツ、アカマツ、他広葉樹
実施主体: 佐久森林組合
カーボンオフセットクレジット:
取組内容: 持続可能な森林管理

2009年9月7日、長野県小諸市内にルイ・ヴィトン
ジャパンの支援を受けて、more trees 第5号の森づく
りプロジェクトとなる“LOUIS VUITTON FOREST BY
more trees”が誕生しました。

プロジェクトの経緯: 森のめぐみである木材を使った
ランクを製作し、様々な顧客からの受注を受けて事
業を展開してきたルイ・ヴィトン。ヨーロッパでは広大
な森林を保有し、自然保護を実践していることも有名
です。その一員であるルイ・ヴィトン ジャパンは、創業
当時から自然に対する恩恵、尊敬の念をもつてものづ
くりをしてきた企業として more trees の森づくりの理
念に共感し、本プロジェクトのスタートにつながりまし
た。小諸高原美術館、白鳥映雪館で調印式が行われ、
長野県副知事・板倉敏和氏、小諸市長・芹澤勲氏、
ルイ・ヴィトン5代目当主パトリック・ルイ・ヴィトン氏、
ルイ・ヴィトン ジャパン CEO エマニュエル・プラット氏、
more trees 代表 坂本龍一が出席し、本プロジェクト
が始動しました。

プロジェクトの進捗: 森づくりのステージとなった長野
県小諸市は、カラマツを主体とし、広葉樹を含む森
の広がる地域です。プロジェクトの対象地は浅間山
登山道入り口、浅間山荘付近の民有林です。小諸市
の森づくりでは、間伐材の活用は勿論ですが、人の
手入れを最低限に抑え、極力自然の遷移にまかせる
試みや、森の癒し効果を発揮する森づくり等を計画し
ています。

これらの森づくりにより、本来地域が持っている特性
を生かし、更に地元の産業へと結びつけることで、森
づくりが更に進んでいく仕組み作りを始めています。
まずは3年間で森林整備を進めるとともに、森のめぐ
みの活用方法について様々な試みを模索してきました。
すでに、ルイ・ヴィトンの顧客の皆様を対象に、ルイ・
ヴィトンの森を通して森林保全について説明するツ
アーを構築したり、森のめぐみである水をボトルングし
収益を森林保全に活用するなど、可能性が広がって
います。

12

more treesの森第6号調印:
宮崎県諸塚村



期間: 2010年3月-
緯度経度: 32°34'30.00"N, 131°21'33.00"E
対象地区詳細:
樹種など: スギ、ヒノキ、他広葉樹
実施主体: ウッドピア諸塚、耳川広域森林組合
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

諸塚村は九州山脈中央、宮崎県北部の険しい山岳
地帯に位置する山村です。日本で初めて、村全体で
FSC認証を取得する等、先進的な森林資源の運用
を行い、林業中心の村づくりを経て発展してしまし
た。主な樹種は針葉樹のスギ、ヒノキであり、建材と
しての活用が進められる一方で、クヌギなどの広葉樹
の活用したシイタケ栽培も盛んに行われています。そ
のため諸塚村の森は針葉樹と広葉樹が混在しており、
モザイク状の景観が広がっています。

プロジェクトの経緯: 2010年3月、宮崎県諸塚村と
more trees の間で協定を締結し、共に協力した森づ
くりが開始されました。この締結により、more trees
と理念を共にした森づくりが始まるとともに、諸塚村
の森林のCO₂吸収能力を活用したカーボンオフセッ
トを推進していくことができるようになります。諸塚村
の森づくりは環境省の定める、オフセット・クレジット
(J-VER) 制度に登録されています。制度への登録のた
めの準備は諸塚村主体で進められ、more trees はプ
ロジェクトによって生み出されるオフセット・クレジット
の活用方法を模索し、形にしてい役割を担います。
プロジェクトの進捗: この森づくりプロジェクトから生
まれる森のCO₂吸収量は、場所や形態を問わず様々
な形で、more trees のカーボンオフセットプログラム
に活用されています。2010年より、ANAカーボンオ
フセットプログラムによるJ-VERの活用が始まりまし
た。また、環境省の2010年度カーボンオフセットモ
デル事業にて、諸塚のクレジットを活用するナチュ
ルローソンの取り組みを推進。採択に至りました。ま
た、新たな取り組みとして山間地域ならではのめぐ
みの一つ「蜜ろう」を活用する取り組みも進めています。
さらに今後、諸塚村の森のめぐみをコスメに活用する
計画も着々と進んでいます。森林リソースの活用には、
様々な技術や発想をトータルに考える必要があります。
今、町全体が林業に対する造詣が深い諸塚ならではの
アプローチが具現化されつつあります。

13

more treesの森第7号調印:

熊本県小国町



期間: 2010年4月-
緯度経度: 33°06'18.00"N, 131°09'34.00"E
対象地区詳細: 熊本県阿蘇郡小国町上田 他
樹種など: スギ、ヒノキ、他広葉樹
実施主体: 小国町森林組合
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

小国町は九州のほぼ中央、熊本県最北東端に位置する一次産業の盛んな町です。町の78%を森林が占め、標高300-800mの間に耕地、山林、原野が開け山間高冷地帯で夏は比較的冷涼で冬は積雪を伴う厳寒となります。

プロジェクトの経緯: 農林業を中心とした一次産業が盛んで、農業面では高冷地野菜の栽培が盛んであり、ジャージー牛乳を始めとした乳製品も特産物になっています。最たる特産は林産資源であるスギであり、町自体がその材の特徴を生かし、公共施設等(バスステーションや体育館)の大型木造建築物の建設に使用することで、有効活用が進められています。中心産業となっている林業においては、町名になぞらえた“小国杉”というネーミングでブランド化を行うとともに、自らが管理する森林においてはSGEC認証を取得しています。SGEC認証の取得と同時に、認証された森林から生まれる材の活用を積極的に行うためのネットワークを形成し、森林組合・製材所・市場から工務店までを含む事業者が一体となり活動を推進しています。

プロジェクトの進捗: このような取り組みの背景には森づくりの基本として、森林を整備することにより林産資源を生みだし有効に活用するとともに、環境を保全することにより間接的に人間社会に貢献していくことに対する意識を再認識し、更に高めることを目的としています。今後はこの意識を外部に発信するとともに、全国初の「九州ツーリズム大学」の開校等ツーリズムの発展を促す取り組みも試みています。そのような先進的な森づくりへの意識はmore treesの持つ理念と共鳴しmore treesはこの地域での森づくりを展開するに至りました。

小国町の森づくりでは、主にカーボンオフセットの取り組みが進み、2010年に行われた生物多様性条約会議のカーボンオフセットのために、小国町の森づくりから生まれたJ-VERを活用しました。また、2012年に第1回目が行われた熊本城マラソンでも、参加者がカーボンオフセットする機会を提供、約2万人が参加しました。

14

more treesの森第8号調印:

大分県日田市



期間: 2010年4月-
緯度経度: 33°02'10.00"N, 130°57'43.00"E
対象地区詳細: 大分県日田市上津江村上野田シカキ石 他
樹種など: スギ、ヒノキ、他広葉樹
実施主体: 株式会社トライ・ウッド
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

2010年4月、大分県日田市上津江町にある第3セクターである株式会社トライ・ウッドとの協定により、日田市上津江の森林整備を推進することになりました。日田市上津江町(旧上津江村)は大分県の西部に位置し、筑後川の源流です。川原川と上野田川というの2支流の周囲に集落が形成されています。総面積のうち91%を森林が占め、さらにその85%が水源涵養保安林に指定されているため、下流域への水源地としての森林の健全な育成が重要な地域となっています。また、気候的に林業に適した地域であり、ここで営まれる林業が地域経済の根幹を支えてきました。

プロジェクトの経緯: more treesと協定を結んだトライ・ウッドは、地域の基幹産業である林業が衰退しつつある状況を打開すべく、平成2年に旧上津江村を中心として設立された第3セクターです。木材の活用をより確かなものとするために、工務店のみならずエンドユーザーとも密につながる仕組みを推進することで、森林の管理から木材の加工・販売までを一貫して行うという新しい木材流通の形態を構築し、地域木材の需要拡大への取り組みを行っています。その中では林業の機械化の推進による生産力向上といったローコスト林業を目指した取り組みも行っています。そういった先進的な木材生産の取り組みを展開しつつ、地域の働き場の確保や、林業における後継者育成を重要視し、約70名の従業員が働いており、人口が1500人に満たない地域において最大級の雇用先となっています。そういった地域に根差した先進的な取り組みがmore treesの森づくりと共感し、協定に至りました。

プロジェクトの進捗: more treesオリジナルプロダクトである「年輪の時計」の材料として、上津江の杉を活用。地元業者であるトライ・ウッドに加工を依頼することで材の活用と地域産業への貢献を進めてきました。また、2011年には株式会社モンテローザの寄付付き商品である“Forest Cocktail”を企画展開し、その収益が森づくりに還元される取り組みは継続し2年目に入っています。

15

more treesの森第9号調印:

新潟市秋葉区



期間: 2010年11月-

緯度経度:

対象地区詳細: 新潟市秋葉区

樹種など: スギ

実施主体: 木質ペレット推進協議会

カーボンオフセットクレジット: J-VER

取組内容: 持続可能な森林管理

新潟市を拠点とするWPPC(木質ペレット推進協議会)は、日本の山を育てることを第一の目的として、林地残材の有効活用するために木質ペレットの製造、普及を推進する団体として設立されました。新潟市にいつ丘陵を舞台に、全国でも前例のない「エネルギーの地産地消」に街ぐるみで取り組んでいます。にいつ丘陵の森林整備により集めた間伐材を、秋葉区でペレットに製造し、秋葉区の地域産業である園芸農家のペレットボイラーとして使ってもらおうという、地産地消の仕組みです。また、にいつ丘陵は、明治・大正時代に石油の産油量日本一を誇った地域でもあり、かつて「石油の里」と呼ばれていました。そして今「石油の里から木質エネルギーの里」へと生まれ変わることをテーマに掲げ、民間と行政、地域が一体となり脱・化石燃料に向けた活動をスタートしていました。プロジェクトの経緯: 従って、カーボンオフセットをはじめとする森の様々なめぐみを活用し、森と都市との橋渡しをすべく日々国内外で森づくりに取り組んできたmore treesと想いを共有するのは難しいことではありませんでした。結果「にいつ丘陵」は日本で8番目となるmore treesの森として加わることとなり、調印に至りました。新潟市のような政令指定都市にmore treesの森ができるのは初となりました。

プロジェクトの進捗: このペレット燃料の消費は、灯油などの化石燃料の使用を減らし、CO₂の削減につながります。環境省の「オフセット・クレジット(通称J-VER)制度」にも認定されていて、今後、秋葉区のオフセットの仕組みによる利益は、地場産業である園芸業者、そして山の整備に還元されます。2010年後半から始まった新潟の森づくりでは、2011年度の「地域発カーボンオフセット事業」に対してカーボンオフセットの取り組みを企画、採択されました。木質ペレットを利用して加温栽培された花卉製品が販売されるたびに、その売り上げの一部が、プロジェクトに還元されるという取り組みを展開しています。

また、LIFE311のペレットストーブを共同開発し、被災地支援にも貢献しました。

16

more treesの森第10号調印:

岩手県住田町



期間: 2011年7月-

緯度経度: 39°08'36.00"N, 141°34'29.00"E

対象地区詳細: 岩手県気仙郡住田町世田米 他

樹種など: スギ

実施主体: 住田町、松田林業、佐藤木材、気仙地方森林組合 他

カーボンオフセットクレジット: J-VER

取組内容: 持続可能な森林管理

住田町はmore treesの東日本大震災の被災地支援プロジェクト「LIFE311」において支援している木造仮設住宅を建設した、林業が盛んな地域です。豊富な森林資源と木材加工施設を有していることから、「森林・林業日本一の町」を目指しており、FSC認証(森林認証)も取得しています。

プロジェクトの経緯: 2011年3月の東日本大震災においては、津波による壊滅的な被害を受けた陸前高田市、大船渡市、釜石市とも隣接する内陸の町であり、地震の揺れによるダメージ以外は大きな被害を受けずにいました。陸前高田市とは同町に端を発する気仙川でつながっており、大船渡市を含めた2市1町は気仙地方と呼ばれ、地域間の結びつきが特に強い地域です。同地方では古くから気仙大工と呼ばれる宮大工の技術が内外から高い評価を受けておりました。海側が被った甚大な被害を前に、こうした人たちが立ち上がったのです。

プロジェクトの進捗: 住田町とmore treesの出会いは、まさにこの東日本大震災がきっかけでした。地震発生から3日後、住田町は多田町長の指示で、国や県に頼らず、地域材を活用した町独自の木造仮設住宅の建設に着手していました。この建設を支援するためにmore treesは、被災地の復興支援プロジェクト「LIFE311」をスタートし、同町での仮設住宅の建設支援と、木質ペレットストーブの設置のための基金を立ち上げ、広く民間からの寄付金を募りました。LIFE311では1年間で約1億5,000万円の寄付が集まりました。その中で、仮設住宅約100棟に設置するペレットストーブを購入・寄贈し、2011年5月に1億2,700万円の寄付金を住田町に贈呈しています。

こうして、もとより林業に先進的な意識を持っていた住田町と、more treesの森づくりの理念が共感し、more treesの森としての協定に至ることとなりました。この協定により、more treesは森林・林業の観点からの被災地の復興支援も念頭におきつつ、森づくりと木質バイオマスの利用促進を住田町と共同で進めていくことになります。

17

more treesの森第11号調印:
岐阜県東白川村・加子母地域



期間: 2012年3月-
緯度経度: 35°42'44.00"N, 137°22'51.00"E (加子母)
35°37'00.00"N, 137°22'00.00"E (東白川)
対象地区詳細: 岐阜県加茂郡東白川村
樹種など: ヒノキ
実施主体: 東白川村森林組合/加子母森林組合
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

東白川村、旧加子母村(現 中津川市加子母)はそれぞれ岐阜県南東部に位置する自治体です。森づくりの舞台となる東白川村、中津川市加子母(旧 加子母村)は古くから東濃ヒノキという銘木の産地で知られ、林業が盛んな地域です。

プロジェクトの経緯: 東白川村は、総面積の90.3%が森林であり、その内73%がヒノキ・スギの人工林です。東濃ひのきの主産地で、地域の経済は林業と木材関連産業に重きが置かれています。原木市場・製材工場・プレカット工場産直住宅と一貫した木材の流通が形成されています。その東白川村に隣接する旧加子母村は同じくヒノキの産地で伊勢神宮の式年遷宮の際の御用材を生み出す神宮備林を育てている地域です。東白川村はFSC、加子母はSGECという森林経営を評価する認証を取得しており、森づくりへの取り組みは先進的で、そのような意識とmore treesの森づくりへの理念が共感し、協定を結ぶに至りました。

プロジェクトの進捗: 2012年3月23日、more treesと東白川村森林組合、加子母森林組合の3者は、「森林づくりパートナーシップ」の協定を締結しました。また、一方でmore treesと岐阜県では、「都市と森をつなぐ交流モデル」の構築において包括事業連携協定を締結しました。以後、ヒノキの精油を活用したコスメグッズを販売するほか、自然や癒しをテーマにした旅「ウェルネス・ツーリズム」の商品化を同県と目指していくこととなり、具体的な活動が展開され始めています。たとえば、2012年5月に、more treesのオリジナルプロダクトにコスメライン“more trees organic”第一弾が登場し、発売されたフットマッサージオイルとハンド・クリーンミストには、岐阜の森から生まれたヒノキの精油が活用されています。また今後も、東濃ヒノキをバりに輸出するプランや、東濃地区のチップ材を活用した紙“more trees paper”の販売、カーボンオフセット(J-VERクレジット)のマッチングなども進めてまいります。

18

more treesの森第12号調印:
鳥取県智頭町・芦津財産区



期間: 2012年7月-
緯度経度:
対象地区詳細: 鳥取県智頭町芦津 他
樹種など: スギ
実施主体: 智頭町芦津財産区、株式会社サングリーン智頭
カーボンオフセットクレジット: J-VER
取組内容: 持続可能な森林管理

2012年7月25日、more treesは鳥取県智頭町にて新たな協定を締結し、森づくりがスタートしました。これでmore treesの森づくりは12か所(国内では11か所)まで広がりました。森づくりの舞台となる鳥取県智頭町は350年以上の歴史を持つ杉の町。「みどりの風が吹く“疎開”のまち智頭」のキャッチフレーズとし、豊かな自然と人々のつながりを育むまちづくりに取り組んでいます。町の総面積の9割以上が山林で占められる同町は森林を大切な財産ととらえ、森の持つ癒し効果に着目し、森林セラピーを町づくりのメインテーマの1つとしても取り組んでいます。

プロジェクトの経緯: 同時に同町はJ-VER制度に参加、J-VERを取得・販売することによって生まれるその追加資金により、林業活性化を目標として町内の森林保全・整備を行うことを目的とした取り組みも行ってきました。芦津財産区はその智頭の林業を支えてきた杉「赤挿苗」の産地であり、西日本有数の林業地として名を馳せてきた地域です。この地域は、400年生のスギが20数本立ち並ぶ見事な人工林を保有する山主もおり、同地域の林業の隆盛が忍ばれるとともに、現在の林業の目指すべき姿が共存している感覚を体現しています。

プロジェクトの進捗: 今回は、more treesと鳥取県智頭町及び智頭町大字芦津財産区の3者間での「森林づくりパートナーシップ」の協定となり、鳥取県を立会人として締結されました。智頭町の森づくりでは、先んじてJ-VERを活用する為の仕組みを構築しており、全日本空輸が展開したANAカーボンオフセットキャンペーンにJ-VERの活用を提案してきました。この取り組みにより800tを超えるJ-VERの活用已成功しています。また、ものづくりのプロジェクトも進展を見せ、智頭に蓄積された技術や文化の再確認にも注力しています。智頭杉を活用し、地元の技術や職人達とともに開発を進め形にしてきました。今後もJ-VERの活用を始め、智頭の誇る杉材、森林セラピーの機会等を活かし、森と都市をつなぐ仕組みを展開していきます。

19

カーボンオフセット事業

「more treesの森」が吸収・固定する二酸化炭素量は、そのままmore treesのカーボンオフセット事業に活用されます。

そもそもカーボンオフセットとは、主に経済活動によって排出されるCO₂を、森林が吸収する量でオフセット(相殺)すること。

世界には様々なカーボンオフセットプロバイダーが存在し、日本国内にも複数のプロバイダーが存在しています。

more treesの特長は、国内のクレジット制度であるJ-VERに対応している点。

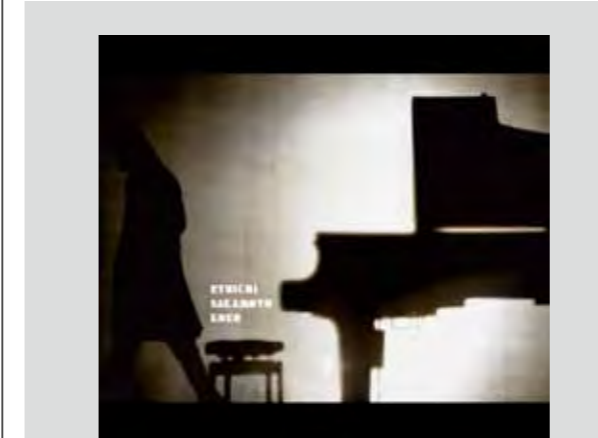
国際的に認可が難しい森林を活用したCO₂削減プロジェクトですが、国土の7割を森林が占める日本では森林のCO₂吸収量を活用していくことは重要なテーマ。

私たちmore treesは、森林を育てることで、世界の気候変動対策に貢献するためにオフセット事業を展開しています。

Project 01:

カーボンオフセットサービス開始

(第1号案件: CD「koko」)



2008年3月、more treesは森づくりによって森がCO₂を吸収する力を活かした「カーボンオフセット」サービスを開始しました。more treesが提供するカーボンオフセットサービスの第1号案件は、エイベックスエンターテインメント株式会社のレーベルcommonsからリリースされたCD「koko」。CDの製作から流通・販売に至るまでに排出されるCO₂を算定し、more trees第1号の森づくりプロジェクトである梶原町の森づくりを通じてオフセットする取り組みです。「koko」のCO₂排出量は1枚につき3kg。このCO₂排出量をカーボンオフセットする為に必要な費用をcommonsと購入者で半分ずつ負担することで森づくりに貢献するという意味を持っています。本取り組みを契機に、以降commonsからリリースされる作品の多くは、more treesの森づくりを通じたカーボンオフセットを取り入れており、その作品数は約100作品に上ります。

Project 02:

坂本龍一の全国ツアーにおいて

カーボンオフセットを導入



2009年3月から4月まで行われた、坂本龍一の日本全国ツアーにおいて、機材の運搬や運営スタッフの移動に伴うCO₂排出量を森づくりによりオフセットしました。坂本龍一のツアーでは、2001年より、会場使用におけるグリーン電力の活用、運営スタッフへのマイボトル持参の呼びかけや食器返却型のケータリングの採用、来場者へ配布するチラシを来場者で自発的に選択してもらうことにするなど、ゴミの削減をはじめとした環境対策を進めていました。今回のカーボンオフセットはその取り組みの延長として採用されました。また、コンサート開催時等に慣習的に行われるアーティストや関係者からの献花においても、辞退を呼び掛け、お花に使う予定であった費用を森づくりに充てる呼びかけも行い成果を上げています。

Project 03:
TOKYO FM: エンヤの森プロジェクト

TOKYO FMとワーナーミュージックジャパンの共同で取り組んだカーボンオフセット。ワーナーミュージックジャパンに所属するアイルランドのアーティスト「エンヤ」の曲をリクエストすると、1曲リクエストにつき北海道下川町の1坪分の森づくりに貢献・参加できるというもの。結果として1曲リクエストあたり5kgのカーボンオフセットにつながります。クリスマスのイベントとしてみんなで東京ドーム1杯分の森づくりを目指そうという目標を立てて、2010年12月の1ヶ月間の取組として行われました。結果、14,000を超えるリクエストが集まり、見事目標である14,153坪を達成することとなりました。これにより70tを超えるCO₂をオフセットしたことになります。オフセットの柔軟な展開に対する可能性を感じる取り組みとなりました。

Project 04:
BMW Japan: MINIMALISM PACKAGE 展開

2011年5月より、MINIの新型車を発表すると同時に展開された取り組みです。「クルマの楽しさだけではなく、環境のことも考える」というメッセージの込められた本パッケージは、グリーンカラーのドアミラー・キャップと専用サイド・スカットル、オフセット証明書、国内の木材を使用したオリジナル・アニマルパズルが同封されました。このカーボンオフセットプログラムでは、MINIMALISM PACKAGE 1台の販売につき、MINI車両を利用した際に排出される二酸化炭素のうち800kg分を、森づくりによってオフセット(相殺)される仕組みを導入。この量はMINI ONE 6速M/Tおよそ7,070km走行分に相当し、オフセットには九州の熊本県小国町の森づくりから生まれるJ-VERを活用しました。

Project 05:
生物多様性条約COP10: カーボンオフセットに協力



2010年10月11日から10月29日に愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約の第10回締約国会議(COP10)およびカルタヘナ議定書第5回締約国会議(MOP5)において、会議開催に伴い発生した廃棄物やCO₂の削減努力等の環境配慮への取組を行い、その一環としてカーボンオフセットが実施されました。海外から参加する主要国関係者の移動や、宿泊、会場でエネルギーを使用することによって排出されたCO₂を世界中のプロジェクトによってオフセットする取組です。そのカーボンオフセットに協力し、全体で26,000t以上のCO₂排出量のうち国内のプロジェクトでオフセットされたのは約3,000tでした。そのうち100tを小国町の森づくりでオフセットしました。

Project 06:
ナチュラルローソン: カーボンオフセットキャンペーン
(環境省モデル事業)

2010年度の環境省モデル事業として株式会社ローソンの運営する「ナチュラルローソン」において取り扱う商品の一部をキャンペーン対象商品とし、地球温暖化対策に貢献し、且つ、日本の森を育むカーボンオフセットキャンペーンを実施しました。消費者は対象商品を購入し、レシートに記載されるQRコードを通してキャンペーンWebサイトにアクセスできる仕組みです。キャンペーンWebサイト上で所定の手続きを経ることによって、1アクセス当たり1kgのCO₂をオフセットすることができる仕組みを採用しました。ナチュラルローソンでは提供する割り箸を国産木材を活用したものに変わるなど、日本の森に貢献する取り組みを続けていました。今回の取り組みは、その姿勢を一層強化するものとなりました。

Project 07:

株式会社モンテローザ・白木屋:

“Forest cocktail” 展開



株式会社モンテローザが展開する居酒屋である白木屋にて、「2011国際森林年」に合わせて森づくり活動の一つとして始まった取組です。more treesの森づくりプロジェクトに貢献するカーボンオフセット商品として『森を育むForest Cocktail (フォレストカクテル)』が全国の白木屋(約250店舗)で販売を開始されました。この商品は、大分県日田市上津江町の「間伐推進プロジェクト」によるCO₂吸収量を利用して、日常生活や当社店舗での飲食などで生じるCO₂(二酸化炭素)を、カクテル1杯につき1kg分をオフセット(打ち消す)することができるサービスをお客様に提供するもので、国が定めた環境月間の6月にスタートしました。1年間で約60t分の森づくりに貢献するこの取組は、2012年現在も続けられています。

Project 08:

ANA: カーボンオフセットキャンペーン展開



2011年11月にボーイング787が就航することに合わせて行われた取組です。機内にてワンコイン(500円)で参加できるこの取組は、森づくりに貢献することで60kg分のCO₂をオフセットすることができ、このCO₂量は、787が就航した東京羽田-岡山間を航空機で移動した場合に排出されるCO₂量にほぼ等しいものでした。2009年より顧客参加型のカーボンオフセットプログラムを実施しているANA。今回のキャンペーンではより分かりやすく、手軽に参加できることを意識し、参加者に「参加証明」として配布した間伐材で製作した787型機ピンバッジを配りました。参加者からは「仕組みが分かりやすい、イメージしやすい」との声が上がるなど、好評を得ることができました。

Project 09:

地方発カーボンオフセット事業3件実施

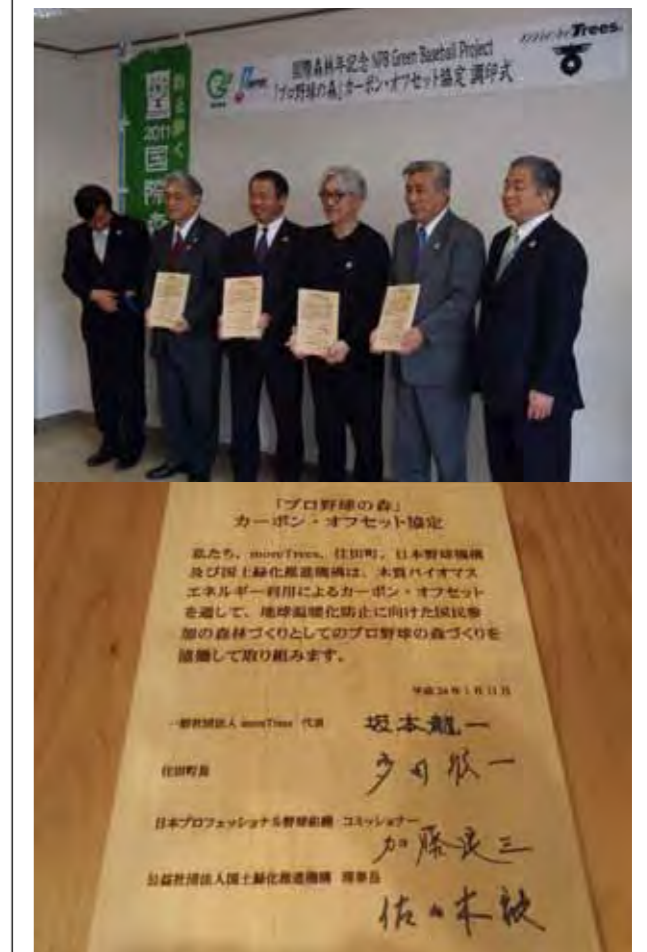
(環境省モデル事業)



2012年の年明けから始まったカーボンオフセットの取組のうち3件が、環境省の進める「地方発カーボンオフセット認証取得支援事業」に採択されました。この事業は、地方における地産地消のカーボンオフセットの取組を支援するというもの。熊本県・熊本市が主催する熊本城マラソンの参加者がカーボンオフセットを通じて熊本県小国町の森づくりに参加する取組、高知県中土佐町の木製品製造事業者が地域の木材を活用しつつ、地域の森づくりに貢献する取組、新潟市秋葉区の花弁商品の収益を木質ペレットの普及に活かす取組です。

Project 10:

プロ野球の森プロジェクトに参加



2012年1月11日、日本野球機構(NPB)と住田町、国土緑化推進機構およびmore treesの4者間で、「プロ野球の森」カーボン・オフセット協定が締結されました。この協定は、プロ野球の試合などで排出される二酸化炭素を、住田町が進めるJ-VERプロジェクトなど、東北のプロジェクトにより相殺(オフセット)するものです。本協定では、NPBが定めている試合時間の短縮目標に届かなかった分の昨年の二酸化炭素排出量(153t)をオフセット。住田町のJ-VERプロジェクトでは、LIFE311により木造仮設住宅に設置された「木質ペレットストーブ」などを活用することにより、化石燃料(灯油やガス含む)などの使用に替えることで二酸化炭素を削減していくこととなりました。

more trees のものづくりストーリー

森林保全は、間伐や下草刈りをして終わりではありません。
プロセスを経て産まれる木材を活用することで初めて循環が生まれます。

仮に、木材活用の目処がたたなければ、
間伐した木材は山に放置することになります。

結果的に森林本来の機能回復を阻害してしまうのです。

more trees では、伐採された木材を活用する
マーケットを構築するために様々なチャレンジを続けています。

オリジナルプロダクトはその一環。スギやヒノキといった
木材の特長と、現代のデザインを合わせ販売しています。

しかし、私たちだけの生産量では、
森林整備を押し進めるほどにはなりません。

そこで、more trees design という株式会社を立ち上げました。

ここでは、企業に新しい製品のプランを提示するなど、より多くの木材が
活用できるプラットフォーム構築にチャレンジしています。

more trees がものづくりをする理由

理想的な森づくりを実現するためには、大きなサイクルを具現化する必要があります。森林を整備すれば木材が産まれます、木材を加工するには技術が必要です、加工後には販売する場が求められます、つまり、木材製品に対するニーズが重要です。このサイクルが繋がると、森に持続可能性の高い収益がめぐります。かつての日本は、家屋も、橋梁などの社会インフラも、暖をとったり料理をするエネルギーとしても木材を使用しており、人工林を構築する理想的なサイク

ルが成り立っていました。一方現代では、生活の中で木材を使用するシーンは減り、コンクリートや鉄、そして樹脂に置き換わりました。さらに、この数十年の間に海外の品質の良い木材が市場に流入しています。木材マーケットの弱体化は、人工林が国土の25%を占める日本にとって深刻な問題として顕在化しています。more trees では、発足した当初から木材を活用できる方法論を模索し始めていました。機会は設立初期に訪れました。伊勢丹からチャリティプロジェクトのお声がけをいただいたのです。内容は、



- 1 整備の行き届いている森の様子
- 2 森から伐り出された丸太が集められた製材所
- 3 森から伐り出された丸太
- 4 丸太から製材された板

デザインTシャツを作り上げ、伊勢丹にて展示販売イベントを実施するというもの。木材活用と直接の関係はありませんが、森づくりの一環として物販を実施するというサイクルは、私たちが思い描いたものと同じです。当時オリジナルTシャツの販売を手がけていた私たちにとって貴重なケーススタディとなりました。

これを期に、more treesでは、森林整備によって生じる木材を活用し、地域の技術を活用し、市場に投入するプロダクトを良質なデザインによって具現化し、その収益を森林保全の活動資金に変え森に還元してい

くという取り組みをスタートさせることとなります。私たちmore treesには数多くの賛同人がいます。彼らと私たちの接点として、ものづくりは大変有効だと考えました。また、私たちの活動をリアルタイムで把握しご理解いただく機会としても重要だと考えました。

more trees オリジナルプロダクト

2008年よりmore treesのオリジナルプロダクトが始動します。第一弾は、スギの木を使った木のUSB。そして第二弾として形になったのは、more trees 賛同人



- 1 2 3 4
- 5 6 7 8

- 1 “身につけるモノから森づくり”をコンセプトにしたTシャツ、販売益の一部がmore trees 支援に
- 2 深澤直人氏デザインの国産材をふんだんに活用したベンチ
- 3 more trees 初、木のオリジナルプロダクト「木のUSB」
- 4 深澤直人氏デザインの鳩時計
- 5 伊勢丹リビングにおける、more trees のプロダクト展示販売の様子
- 6 熊谷有記氏デザインのプローチ。様々な樹種を活用している
- 7 清水慶太氏デザインの万年カレンダー。国産ヒノキを活用している
- 8 小林幹也氏デザインのフレーム棚。国産ヒノキを活用している

であり、プロダクトデザインの第一線で活躍する深澤直人氏が手がけた「ベンチ」です。プロダクト制作中には高知県中土佐町にmore treesの森が誕生したこともあり、深澤氏を現地に招待し私たちの取り組みについて説明させていただきました。

そして2009年深澤直人氏の手がけた鳩時計が完成、伊勢丹新宿店で販売し好評を得ました。発売時には、複数の鳩時計を複数の賛同人の方々にアートピースとして一点ものに仕上げる取り組みも実施しました。オリジナルプロダクトをさらに発展させ、同じく賛同人

である清水慶太氏、小林幹也氏、熊谷有記氏の3デザイナーを加えラインナップを充実させました。この時重要なテーマとしたのが、日本の森林の約40%を占めているスギ、ヒノキをはじめとした針葉樹をメインの素材として活用すること。カレンダー、棚、プランターなど多彩なプロダクトをそろえました。また取り組みの一環として、デザイナーの面々を高知のmore treesの森にお連れし、人工林の現状やmore treesの取り組み、さらに地域に眠る様々な木工技術についての視察を行いました。日本の人工林を取り巻いて



いる現状は、まだまだ一般的な認知を得られていません。デザイナーの方々は、現地視察を通して、現状に驚き意識を新たにしていました。

続く2010年には、拡大してきたプロダクトの管理運営、そして様々なイベントプロデュースや企業に対するCSRコンサルティングの実施を目的にmore trees designを設立しました。そしてこの年、角田陽太氏、倉本仁氏、現代アーティストである鈴木康広氏、鈴野浩一氏の4名を新たに加え、オリジナルプロダクトを制作しました。もちろんmore treesの森の視察も

実施しました。そもそも日本のスギとヒノキは柔らかい木材であり、小さなプロダクトに仕上げるには加工が難しく、デザインにも独自のアイデアが必要です。現地に足を運ぶことで、技術や木材の特性に触れることができ、デザイナーの方々にも刺激を与えます。最終的に決定した2010年のプロダクトラインナップのコンセプトは“Play the Living”。生活の中に木材を取り入れるための楽しみ方を提案するために、オモチャから日用品まで様々なラインナップをそろえ、木材の可能性を追求しました。最初のお披露目となった展示

会は東京六本木にあるAXISのご協力を得て実施しました。イベントのレセプションには400名近い方が訪れ、高い注目度に我々も驚きました。

これまで制作してきたプロダクトは、首都圏を中心に各地のインテリアショップ、またはWebショップの“more trees store”にてご購入いただけます。

次なるものづくりへ

森づくりの一環としてもものづくりを実践してきたmore treesですが、現在は新しい展開を視野にいれていま

す。大きな理由となったのは、小規模な我々がどんなにもものづくりを行っても、あくまでケーススタディの蓄積にしかならず、大規模な森林整備につながるほどの物量を流通させることができないことです。また、スギやヒノキを現代の生活に合わせて加工するためには設備投資も必要です。一方、日本全体に視点を移してみれば、今後100年で大きく人口減少していくことが予想されているとはいえ、まだまだ巨大なマーケットが存在しています。さらに世界的なメーカーも多数存在しており、技術を保有する工場があり技術



①
2012年に発表したmore treesのオリジナルプロダクトラインナップ



more trees store
<http://shop.more-trees-design.jp/>

者もいます。そこでmore treesでは、今後のものづくりの方向性として、日本そのものに蓄積された技術と企業、そしてマーケットをつなぐコンサルティングやプロデュースに注力したいと考えています。その一環として、2011年more trees designを株式会社にし、企業と地域、森林と都市をつなぐための体制を強化しています。

もちろん私たちには、自ら実践してきたものづくりのノウハウがあります。また、森林や木材に関する知見とノウハウも保持しています。さらに、多くの企業とコラ

ボしてきた実績や、自らものづくりのアイデアを生み出す力、そして賛同人もいます。こうしたリソースをフル活用し、メーカーに情報を提供し、ものづくりのプロデュースを実践していくことができれば、大規模な森林整備につながるものづくりが実現できるのではないかと考えています。

実は2011年には、こうした考えを先取りする取り組みにも挑戦しています。NTTドコモから発売された木のケータイ“TOUCH WOOD”です。more treesの森で収穫されたヒノキを、オリンパスの三次元成形圧

縮技術で加工し、シャープが携帯電話として製造し、ドコモが販売した事例です。高知県中土佐町にある約20haのmore treesの森の整備が概ね完了してしまうほど、たっぷり木材も活用できました。また、相性が悪いと言われていた木材と精密機械の両立も実現できたのです。消費者の評価も高く、初回予約は数十分で完売する売れ行きとなりました。こうした取り組みを通じて、モノづくりとしても、森づくりとしても革新的な事例を増やしていきたいと考えています。

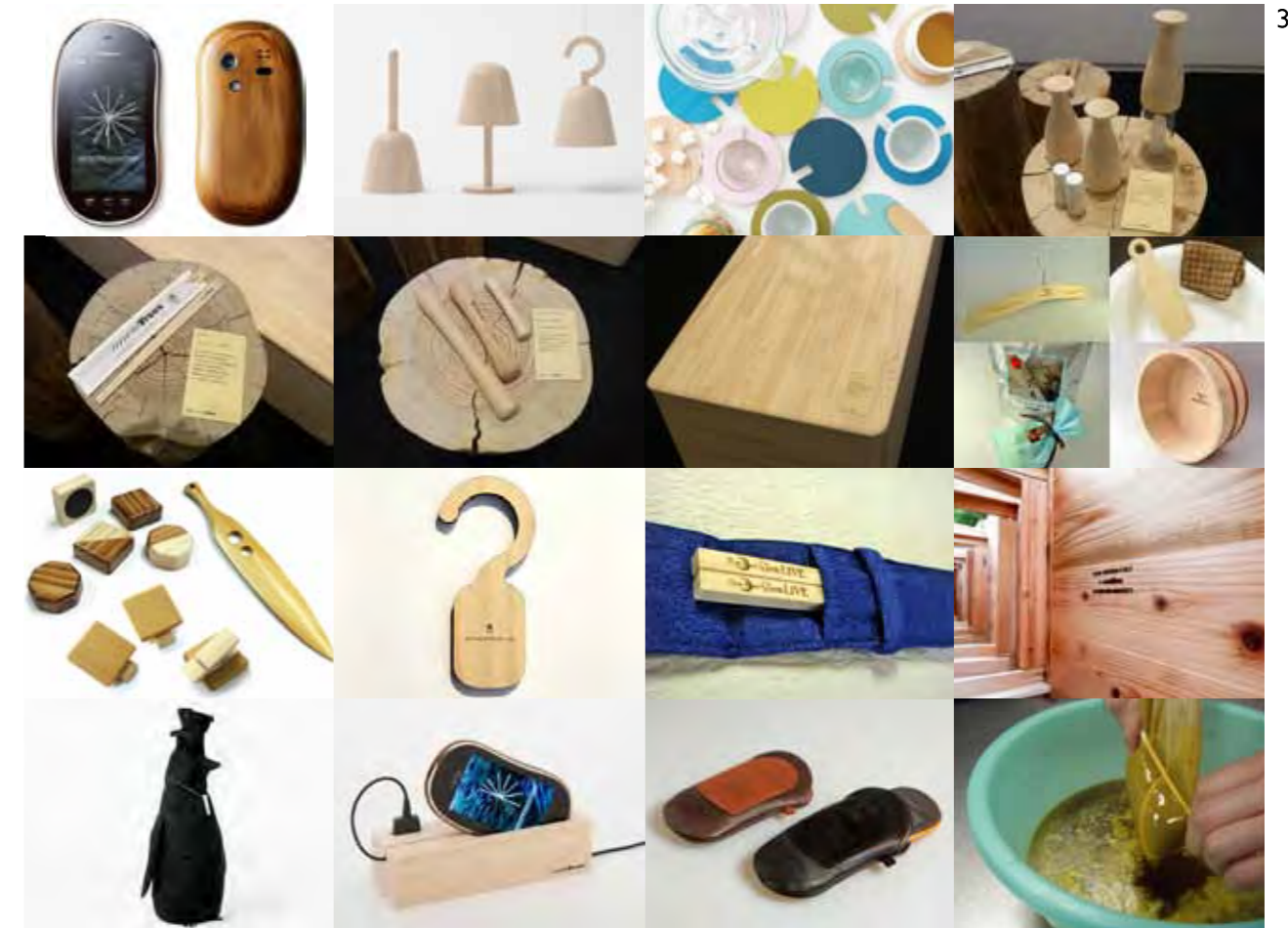
また、木材以外にも、ものづくりによって活かすことの

できる森のめぐみは数多く存在します。樹の葉から採れるオイルをはじめ、柑橘、蜂蜜、鹿革など、その土地によって森から生まれるめぐみは様々です。すでに私たちは、TOUCH WOODのケースに鹿革を活用し、2012年には樹の葉や柑橘から採れる精油を活用したコスメライン“more trees organic”を開発する等、森のめぐみの新しい活用法をさらに展開していきます。



- 1 3 5 6 7 8
- 2 4 9 10 11 12
- 13 14 15 16
- 17 18 19 20

- 1 2010年、六本木AXISで開催した「more trees展」の様子
- 2 「more trees展」レセプションの様子
- 3 more trees organicのボディオイルとフットマッサージオイル
- 4 more trees organicのハンドクリーンミスト
- 5 NTTドコモから販売された国産ヒノキを活用した“TOUCH WOOD SH-08C”
- 6 伊勢丹のチャリティキャンペーン「ベルオルゴール」
- 7 金沢21世紀美術館にて販売されている国産材を活用したコースター
- 8 アットアロマが販売している木のディフューザー
- 9 more treesに協賛している国産材を使用した割り箸
- 10 犬が噛んで遊ぶための国産材のおもちゃ“Chew for more trees”
- 11 四万十ヒノキを活用した棺「エコフィンWILL」
- 12 ナチュラルローソンのプレゼントキャンペーン
- 13 梶原町のヒノキを活用した企業向けノベルティ



- 14 国産のヒノキを活用した消臭フック
- 15 イベント用に製作されたヒノキの箸
- 16 ルイ・ヴィトン ジャパンの取り組みで、被災地に贈られたテーブル
- 17 三陽商会との取り組みで生まれた、ヒノキのオガコが詰まったペンギンアート
- 18 TOUCH WOOD SH-08C用のクレイドル
- 19 鹿革を活用したケース
- 20 新たな展開を計画している「蜜ろう」

more treesのツーリズム

more treesの「森づくり」は、魅力的な森の資源、森のめぐみをサービスや商品という形で活用し、都市に供給することで森と都市をつなぐことにあります。

ここで言うめぐみとは森や自然そのもの、そしてそこから生まれる木材などのモノはもちろんのこと、森地域に根差す歴史や文化も魅力的な森のめぐみであると考えています。

more treesではこうした理念をもとにツーリズムの活性化も視野に入れています。

ツーリズムの具現化により、「人」どうしの結びつきが生まれ森と都市が「顔の見える関係」でつながります。

既に「more treesの森」がある地域やmore treesの活動に賛同する企業と協働で取り組みを始めています。今後さらに力を入れていきたい分野として考えています。

more treesがツーリズムに力を注ぐ理由

森の活用方法は実に多岐に渡ります。ツーリズムはその中の一つである「森という場」と「森のある地域」が持つ魅力を活用するサービスです。森林浴という言葉に集約されるように、森を訪れることは人間の身体をリラックスさせてくれる効果があります、また、森は生物たちの宝庫であり、生物多様性をまじかに感じる事ができる貴重な場所です。その中にはもちろん樹木も含まれ、そこから生まれる木材は代表的な森のめぐみの一つです。

森という場から得られるめぐみは様々で、これらを現地で体験できることこそ究極のリアルのつながりを感じる機会であると考えます。森のある地域へ行き、森を感じることは森のめぐみに対する理解と、それを生み出す森の大切さを効率的に伝えてくれます。

こうした考えに基づき、more treesでは森へのツーリズムにも力を注いでいます。

すでに、オリジナルプロダクトを制作するデザイナーなどを現地にアテンドしたり、旅行会社とエコツアーの共同企画、長野県小諸のレイ・ヴィトンの森ツアー



①

高知県中土佐町の沈下橋。森の地域には様々な景観がある

をコーディネートするなど実績を積んでいます。地域からも嬉しい反応があります。都市部の人間との交流が生まれることで、都市の感覚に地域の間が触れます。「顔の見える関係」にできるのです。この最も「つながり」を感じる関係が構築されることで、山側の地域の人々も、自分たちの仕事に対する愛着が増していくのみならず、新しい品質へのこだわりも生まれます。また、地域の人々は毎日のように自分たちの森林を眺めています。都市部の人間にとっては発見の連続です。これが、地域の人々に対して、自分た

ちの森林を見直すポジティブな効果ももたらします。こうした知見を蓄積しながら、今後more treesではさらにツーリズムへと注力しながら、森と都市をつないでいく取り組みを強化したいと考えております。海外に目を移せば、観光資源としての森林の力は、「使う森林資源」だけではなく、「守って活かす森林資源」という概念になりつつあります。地元の森林の経済価値を高めることで、森林が地元の人々によって積極的に守られるというサイクルを作り出そうとする動きです。日本と世界で事情は異なりますが、森林を守るため

の取り組みが活発化しつつある状況には違いはありません。ツーリズムというシンプルな取り組みの中には、多様なサービスが織り交ぜられるだけでなく、結果的に森林保全に貢献でき、地球環境の改善の一助になる可能性があるのです。日本国内で生み出さなければならないツーリズムのあり方も、世界で生み出すべきツーリズムのあり方も、私たちmore treesは、森づくりの一環としてとらえ、さらに推進していきたいと考えています。



- 1 2 5 6
- 3 4 7 8

- 1 森林浴の効果が科学的に認められたセラピーロード
- 2 新潟県秋葉区にて間伐体験の指導を受けるmore trees関係者
- 3 小諸市の「more treesの森」における乗馬体験の様子
- 4 タカシマヤカード会員向けにコンテンツを提供した岐阜の森ツアー
- 5 企業との共同企画エコツアーの様子
- 6 地域の良さを再認識、PRするためのプレスツアーの様子
- 7 他NPOの開催したエコツアーの様子。北海道の森のある下川町
- 8 重要文化財が街並みを形成する智頭町



その他の取り組み

一般社団法人である more trees の収益の多くは寄付でまかなわれています。

従って私たちの行動は、社会貢献性が高いことが必須です。

社会に貢献する事業を立ち上げ寄付を募る、まさにファンドレイジングです。そして、社会的事業に資金を投入し、社会をポジティブにしていくというスパイラルを具現化することが求められます。

2011年、東日本大震災を契機に、私たち more trees は、震災復興と言う日本最大級のテーマに挑みながら、より社会貢献できる組織としての可能性を高めるために LIFE311 を立ち上げました。

さらに、これまでも、自らの活動を啓蒙するためにさまざまなイベントのカーボンオフセットを手がけたり、講演を実施しながら広く存在を告げています。

さらに社会に貢献できる組織になれるよう、こうした活動も私たちに欠かせない要素なのです。

LIFE311



- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6

- 1 岩手県住田町に完成した木造仮設住宅
- 2 2011年7月、住田町に完成した木造仮設住宅を訪問した当時の様子
- 3 津波により被災した陸前高田市
- 4 LIFE311プロジェクトを開始するにあたり現地を訪れ打合せ
- 5 LIFE311の支援の一環として木造仮設住宅に設置された木質ペレットストーブ
- 6 2012年5月、LIFE311により集まった寄付金贈呈

more trees 被災地支援プロジェクト「LIFE311」は、岩手県住田町が自費で建設した木造仮設住宅の建設費用を支援することと、同住宅に東北の厳しい冬を乗り切るための木質ペレットストーブを寄贈するための費用を支援することの2つを目的に、民間による善意を募るためにスタートしたプロジェクトです。2011年4月にはWebサイトを開設し、木造仮設住宅建設や木質ペレットストーブを設置することの意義の普及啓発を行うとともに、支援目標3億円を掲げ、法人・個人を問わず皆さまよりご寄付を募って参りました。また、2011年7月には活動の普及啓発および募金を目的としたイベントを六本木ヒルズの協力を得て開催しました。イベントでは実際に建設されている仮設住宅を展示し、イベント来場者に仮設住宅そのものを知って頂く機会としました。同時に岩手県住田町をはじめとした地域の特産物を販売するマルシェを展開することで、まじめに被災地のことを考えながらも、楽しんで被災地支援の取り組みに参加できるイベントを目指しました。イベント会場への来場者は3,000人を超え、多くの方からLIFE311へのご協力をいただくことができました。

more trees が行う普及啓発・募金活動に並行して、2011年6月には仮設住宅が完成し、つづいて2011年10月には目標数のペレットストーブを購入し仮設住宅へ設置を完了いたしました。2012年2月には皆さまからのご寄付合計が1億円を突破し、2012年5月には当時までに皆さまからいただいたご寄付からペレットストーブの購入費用等を差し引いた金額である約1億2,700万円を住田町に寄贈いたしました。LIFE311は支援目標の3億円に向けて活動を継続しており、現在もなお活動に賛同してくださる皆さまからのご寄付が集まっています。

出展など普及啓発



- 1 2
- 3 4
- 5 6
- 7 8

- 1 2009年のデザインタイドに合わせて行われた鳩時計の展示様子
- 2 同上。当時開発されたmore treesの製品の展示発表も実施
- 3 2010年のmore trees展の様子
- 4 2012年に行われたコニカミノルタ企画展。more treesの活動を紹介するインスタレーションや映像、LIFE311の木造仮設住宅を再現した展示
- 5 東京・名古屋・福岡にて開催した写真展“TOUCH WOOD”のディスプレイ
- 6 2011年大阪マラソンExpoに出展
- 7 2010年のmore trees展と同時に開催した写真展の様子
- 8 2011年ギフトショーへのプロダクト出展の様子

2007年の設立以来、more treesの森づくりへの思いを皆さまに伝える機会として、様々なイベント等に出展させていただきました。森林保全団体として他団体が行うチャリティイベントや環境活動の啓発イベントに、カーボンオフセットの仕組みを活用してビジネスシーンから森づくりを行う団体として、カーボンオフセットExpo (2010)やカーボンマーケットExpo (2012)といったビジネスイベント等に、また、良質なデザインの観点をもちながらモノづくりを行う団体としてプロダクト発表等の場にも出展してきました。また、アートの観点をもち、森をテーマにした写真展“TOUCH WOOD”も開催しています。

プロダクトの発表・展示としては、2009年に鳩時計をはじめとしたオリジナルプロダクトを発表したデザインタイドや、2011年のギフトショー等に参加しました。デザインにこだわったモノづくりを行い、それを通じて森づくりを行うということを皆さまに知っていただきたく展開してきました。

また、企業の企画展にコンテンツを提供することで、more treesの取組を広く告知する機会をいただくこともできました。2012年にコニカミノルタプラザで行われた企画展「人と木のつながり」では、more treesの取組みをご紹介いただくとともに、来場者の方々が実際に木に触れ、少しでも森を感じていただけるような仕掛けやワークショップのコンテンツについてもお手伝いさせていただきました。

森をテーマにした写真展“TOUCH WOOD”では、more treesの活動に賛同する多くの写真家の方々に協力をいただきました。2009年から2010年に東京、名古屋、福岡の3か所で開催、写真家たちが独自の視点写した森の姿のアートから、森林保全の意義と大切さを体感する機会を提供することができました。

講演など



- 1
- 2
- 3 4

- 1 more treesの年次報告会ともいえるmore treesミーティングの様子
- 2 同上。代表坂本、副代表池田及び事務局長水谷のトーク
- 3 トークイベント“more trees night”の様子
- 4 講演にて発表する事務局長水谷

more treesでは、環境展示会の代表的なイベントである「エコプロダクツ展」を始め、様々な環境系イベントにお招きいただき講演する機会を得ています。こうした場を積極的に活用しながら、more treesの活動紹介や、森づくりについての理念等をお話しさせていただいています。

また、活動を展開していく上で培ってきたノウハウや森づくりに対する考え方、視点等を元に、講義を開催させていただく機会も得ることができました。たとえば、2008年より毎年、港区立エコプラザでは、「森づくりプランナー講座」と題した森についての連続講座を開催いたしました。現代における森にまつわる社会的問題やそれに対する取組等を勉強しながら、実際に森を訪れて森について考える機会も提供してきました。more treesの活動でもある、「森のめぐみ」を活用するとはどういうことなのかを座学と体験から楽しく学んでいただけるコンテンツとして、多くの人が参加し盛況となりました。

また、more treesの活動に関わる人々のトークショー“more trees night”、more treesの1年間の取組みを振り返るmore trees meeting等、自らが発信するイベントも開催し、多くの方々にご参加いただくことができました。

more treesの活動に賛同する人々をゲストに招いてのトークショー“more trees night”では、Restaurant-Iの美味しいお料理とワインを頂きながら、more treesのプロダクトをてがけたデザイナーをはじめとする賛同人トークや、more treesの活動や日本の森林の現状についてのトークが展開されました。

また、毎年1回開催してきたmore treesミーティングでは、1年間の活動報告を行いつつ、more treesにゆかりのある方々のトークセッションが行われました。

収支決算

科目	第5期	第4期	第3期	第2期	第1期
【収入】					
収入	69,416,318	39,332,342	51,606,202	19,911,944	5,993,849
収入合計	69,416,318	39,332,342	51,606,202	19,911,944	5,993,849
【活動費】					
高知県梼原町			3,000,000	3,000,000	3,000,000
高知県中土佐町	3,937,500		3,500,000	3,500,000	
北海道下川町等		2,000,000	2,965,200		
*Aフィリピン共和国キノ州	12,703,229	*B	*A		
長野県小諸市	3,000,000	2,500,000	2,497,950		
宮崎県諸塚村	441,000	628,425			
熊本県小国町	485,100	2,384,025			
大分県日田市	1,286,275				
新潟県新潟市					
岩手県住田町					
岐阜県東白川村	450,000				
鳥取県智頭町	5,577,000				
間伐材商品仕入れ		92,400	15,497,332		
合計	27,880,104	7,604,850	27,460,482	6,500,000	3,000,000
期首商品棚卸高	5,617,288	7,474,348			
期末商品棚卸高	2,553,090	5,617,288	7,474,348		
活動費	30,944,302	9,461,910	19,986,134	6,500,000	3,000,000
差引	38,472,016	29,870,432	31,620,068	13,411,944	2,993,849
【販売費及び一般管理費】					
*1人件費	18,204,218	14,950,395	11,808,941	5,498,885	
*2外注・委託費	3,040,124	5,155,633	6,644,821	3,615,496	1,656,754
会議費・接待交際費	135,756	363,799	470,746	438,088	10,960
*3旅費交通費	3,085,453	2,179,351	1,439,600	1,547,275	139,620
通信・運搬費	432,733	651,299	398,173	114,923	1,580
消耗品費	683,536	213,425	884,662	407,106	155,404
新聞図書費	18,400	18,280	21,411	2,579	
諸会費	470,000	465,000	56,000	320,000	
支払手数料	1,243,020	117,800	127,455	623,210	35,910
施設経費	2,123,520	1,375,000	1,675,000		
リース料	448,704	741,444			
租税公課	5,800	5,600	49,000	87,000	535,590
寄付金	21,000	35,000	10,000		
研究開発費		1,500	597,497	392,376	
減価償却費	451,500	451,500	451,500	188,125	
雑費	2,300	102,412	6,895	5,810	
販売費及び一般管理費合計	30,366,064	26,827,438	24,641,701	13,240,873	2,535,818
営業利益金額	8,105,952	3,042,994	6,978,367	171,071	458,031
【営業外利益】					
受取利息	2,623	51,836	5,366	24,859	4,173
雑収入	457	44,609			
営業外収益合計	3,080	96,445	5,366	24,859	4,173
経常利益金額	8,109,032	3,139,439	6,983,733	195,930	462,204
税引前当期純利益	8,109,032	3,139,439	6,983,733	195,930	462,204
法人税等	70,000	70,000	64,100	117,500	188,300
当期純利益金額	8,039,032	3,069,439	6,919,633	78,430	273,904

*A 別度預り寄付より27,277,173円を提供

*B 別度預り寄付より5,136,751円を提供

*1 給与手当、及び福利厚生費

*2 森林整備費用は含まず

*3 出張費含む

賛同企業

ANA セールズ株式会社	株式会社オンワード樫山	株式会社ヤマハメディアワークス	テレビ東京ブロードバンド株式会社
Aria 株式会社カニワ	株式会社カタログハウス	株式会社ユニテッドアローズ	テレビマンユニオン
BUNGO Co.,Ltd	株式会社ガレリア・マリノ東京	株式会社ユニオンコーポレーション	凸版印刷株式会社
ELTTOB TEP ISSEY MIYAKE	株式会社木下工務店	株式会社横尾材木店	鳥居泌尿器科内科
GLOCEAN	株式会社幻冬舎	株式会社リクルート	日産自動車株式会社
JOE'S SOAP	株式会社コーセー	株式会社リバースプロジェクト	日本ホテル株式会社
KDDI 株式会社	株式会社コレクト	株式会社ローソン	日本ロレアル株式会社
LVJ グループ株式会社	株式会社サイバーエージェント	株式会社ワーナーミュージック・ジャパン	ビー・エム・ダブルユー株式会社 MINI Japan
M パターン研究所	株式会社サイバード	株式会社Cream	飛騨フォレスト株式会社
SAPPORO ショートフェスト実行委員会	株式会社三陽商会	株式会社アクセリオン	ヒューマンディベロップメントリポート
TDK 株式会社	株式会社シーリージャパン	株式会社アンダーザライト	フレームワークスジャパン株式会社
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	株式会社ジェイアイエス	株式会社アンビエンテック	平和紙業株式会社
青山商事株式会社	株式会社ジャパンエフエムネットワーク	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ	ベナスタス株式会社
アキト総合設備株式会社	株式会社スーパーホテル	株式会社エムズアソシエイツ	毎日アースデイ株式会社
アクサ・ローゼンバーグ	株式会社そごう・西武	株式会社コスモスモア	マックスレイ株式会社
証券投信投資顧問株式会社	株式会社大京	株式会社シンクヴィジョン	三越伊勢丹ホールディングス
アサヒベット株式会社	株式会社タイムレス	株式会社スイーツ デザイン ラボ	三菱レイヨン・クリンスイ株式会社
アットアロマ株式会社	株式会社たかくら新産業	株式会社ディアイケイ	宮の森フランセス (マズダブランニング)
ウィルライフ株式会社	株式会社玉屋	株式会社ニューポート	ヤフー株式会社
エイベックス・エンタテインメント	中越パルプ工業株式会社	株式会社ビッグウィル	有限会社オフィスリンクス
株式会社	株式会社テレビ東京	株式会社ホットスタッフプロモーション	有限会社クレイドル
エスバイエル株式会社	株式会社ドゥ・ワン・ソーイング	株式会社リクルート	有限会社セブンダイヤルズ
大阪マラソン組織委員会	株式会社トーハン	株式会社リソウ	有限会社羽根建築工房
オリンパス株式会社	株式会社豊通エレクトロニクス	株式会社高橋	ユニプレス株式会社
カタシモワインフード株式会社	株式会社ドライブジェイビー	株式会社中園建築	
株式会社CS グループ	株式会社トラボックス	株式会社日本グリーンエナジー	
株式会社FIT	株式会社ナノ・ユニバース	久米繊維工業	
株式会社ICL	株式会社西脇一郎デザイン事務所	グランドハイアット東京	
株式会社JAM HOME MADE	株式会社ニューズ	コスメキッチン	
株式会社JTB 沖縄	株式会社ニューポート	酒井産業株式会社	
株式会社JUN	株式会社パーニーズジャパン	ジーブラン株式会社	
株式会社J-WAVE	株式会社パーリー・ジャパン	ジェネラルクロップスカンパニー株式会社	
株式会社PIO	株式会社ヒトミワイナリー	ジェミー株式会社	
株式会社QVC ジャパン	株式会社プラスゲイン	シャープ株式会社	
株式会社Strapya Next	株式会社ブレイン	シャレックス株式会社	
株式会社ZERO	株式会社フレスコ	新日本カレンダー株式会社	
株式会社アダル	株式会社プロマックス	ストローファーム	
株式会社イワタ	株式会社フロンテッジ	住商情報システム株式会社	
株式会社インクス	株式会社ポイント	社会貢献クラブ Earth One	
株式会社ウシオスベックス	株式会社ボンテヴェッキオホッタ	星和住研株式会社	
株式会社オリエントコーポレーション	株式会社モンテローザ	全日本空輸株式会社	
株式会社オン・ザ・ライン	株式会社ヤマサキ	丹波ワイン株式会社	

掲載媒体

Aera stylemagazine	pen	広報中土佐
Alterna	PHP BUSINESS THE 21	高知新聞
beacon fire	R25	埼玉新聞
big issue	rinya	産経新聞
brutus	SAMURAI.JP	週刊ダイヤモンド
casa brutus	sankei express	住む
courrier japon	sankeiEX	織研新聞
cultureguide	sesame	信濃毎日新聞
days japan	spice of	新潟日報
design & data	SUUMO	神戸新聞
design tide tokyo	Switch	西日本新聞
dictionary	the future times	静岡新聞
ecocolo	tokotoko	中国新聞
ecomom	vogue	朝日新聞
ecotwaza	アイソス	長崎新聞
elle	キットハウス	通販生活
elle japon	グリーンパワー	東京新聞
enzine	コンフォルト	読売新聞
eyeco	ソトコト	南日本新聞
figaro japon	ダヴィンチ	日刊工業新聞
future	デザインの現場	日経エコロジー
GQ	パーソナルギフト	日経トレンディ
hanako	ひなも新聞	日本住宅新聞
kaeru ryusoku	フィールドライフ	日本農業新聞
kami cocoro	ポバイ	福島民報
lee	マイ ECO	毎日新聞
Lightly	メンズブランド	翼の王国
LORO	モダンリビング	林経協季報
men's ex	林政ニュース	
mens joker	リンネル	
men's non-no	わわ新聞	
Milk	愛媛新聞	
misaki	河北新報	
modern living	環境ビジネス	
monocle	岩手日報	
monomax	季刊ちゃぶだい	
mono マガジン	熊本日日新聞	
nikkei design	月下資源環境対策	
nile	現代林業	
node	広報すみた	
nylon crystal ball 特別冊子	広報下川	
OZ plus	広報会議 (小諸市)	